

葉集を読む

松岡 隆子

探梅の先へ先へと鳥一羽

鈴木 富代

もう少し行けばもう少し行けばと梅の花の幽かな香りを求めてひたすら山野を歩く。目あての梅の木があるわけでもなく、あるかどうかもわからない梅を求めて歩く探梅の心はいかにも風雅である。ようやく畦道の外れの古木に二、三輪の白梅を見つけた時の心躍りは格別である。先を急ぐ鳥影は作者自身の分身のようだ。

淡雪や和紙にたしかむ裏表

河本 順

日本古来の手漉きの和紙は洋紙と比べて耐久性もあり優しい手触りと見た目の美しさで今も好んで使われている。通常つるつるしている方が表でざらざらしている方が裏になる。和紙によっては分かりにくいものもあるが、光に透かして見て表面がささくれている方が裏である。裏表を確かめたところで河本さんはその和紙に何を書かれたのだろう。大切な人への手紙だろうか、それとも自作の俳句を書かれたのかもし

れない。淡雪の降る夕べ、墨の香の漂う部屋で文机に向かう静かなひと時を想像してみた。

春きざしけり広報に新講座

二木 公子

各地域の自治体が発行している広報紙は住民にとって暮らしに役立つ情報が掲載されている。新型コロナウイルスに接種の情報も広報紙に頼るところが大きかった。催し物の案内やサークル活動の情報などもありがたい。二木さんは手元の広報紙に新しい講座案内を見つけ、春の到来に心躍りを覚えている。身辺の些細なことに季節の推移を感じることができるのは毎日丁寧に暮らしていればこそと言える。

辛夷の芽遠き月日のもどり来ぬ

高野 達子

辛夷はまだ寒い時期からふわふわの毛に覆われた花芽をつける。早春の日差しのなか辛夷の芽が日に膨らむのを見てみると、来し方の日々が懐かしく思い出されるのである。二人で歩いた辛夷並木の風の匂い、旅先の山中で出会った真っ白な辛夷のことが昨日のことのように思い出される。思い出されるといふより思い出の中に入り込んでいる。〈遠き月日のもどり来ぬ〉の措辞には高野さんの思いが籠っている。

あれこれと一人で決めて春寒し

見上 恵

見上さんは昨年ご夫君を亡くされた。長い間自宅で介護しておられたが最後は施設に入所されていたようだ。居るはず